
君の存在の大きさ

表

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君の存在の大きさ

【Nコード】

N7183A

【作者名】

表

【あらすじ】

気が付けばいつも傍にいた彼・・・江戸川コナン・・・組織が壊滅した次の日は彼は私たちの前から姿を消した・・・

プロローグ

気が付けばいつも傍にいた彼・・・

江戸川コナン

組織を壊滅させた次の日・・・

彼は私たちの前から姿を消した・・・

ブログ（後書き）

初投稿します。表です。

まだまだ未熟ですが頑張りたいと思います
ちなみにコ哀です

彼が消えた日

哀「やっぱりこの姿で生きていくしかないのね・・・」

私は結局彼を戻せなかった。工藤新一の姿に・・・

昨日組織は壊滅した。たくさんの人々のおかげで

私を初め、博士、服部君、黒羽君、警視庁やFBIの人たち、工藤君の両親・・・

そして江戸川コナン・・・

ベルモットやウォツカの死亡も確認された。しかしジンだけは確認されなかった。

解毒剤のデータも見つからなかった。

今日もいつもと変わらない日々だと思っていた

哀「博士、行ってくるわね」

博士「気をつけていくんじゃぞ」

玄関を開けると「よあ、灰原」と声を掛けてくれる彼

そう、いつも居る筈の彼

でも今日はいない

「どうしたのかしら・・・」

まあ気にすることないと阿笠邸を後にした。

一人でしばらく歩いていると

???「哀ちゃん」

???「灰原」

???「灰原さん」

聞き慣れた声が聞こえる

私は後ろを振り向いた。そこには少年探偵団の歩美、元太、光彦がいた。

哀「おはよう・・・」

私は微笑みながら言った。

光彦「おはようございます。あれ、コナン君いませんね・・・」

歩美「哀ちゃん、どうして？」

哀「さあ、知らないわ・・・」

本当は私が一番知りたいはずなのに・・・

歩美「コナン君のことだから大丈夫だよ」

哀「ええそうね」

彼のことから心配ないと思った。そう思いたかった。

そして彼のことを考えながら学校へ向かった。

私の隣の席は彼だが今は空いてる・・・

（本当にどうしたのよ・・・）

そんなことを考えている時

がらっ

教室のドアが開く。

先生が入ってくる

小林「・・・みなさんにお話することがあります。江戸川君が行方

不明になりました・・・」

（え・・・）

（工藤君が・・・行方不明・・・？）

私は先生の言葉の意味がわからなかった。

私は我に返り咄嗟に立ち教室を出た。

「灰原さん！」

みんなの呼ぶ声が聞こえる。しかし私はそれどころではなかった。

哀「はあ、はあ・・・博士！！」

博士「哀君、どうしたんじやそんなに慌てて・・・」

哀「工藤君が行方不明ってどういうこと」

博士を睨む様にして聞く。

博士はしばらく黙り込んだ。

博士「すまん。哀君、わしも詳しいことは知らんのじゃ・・・」

博士は申し訳なさそうに答えた。

博士は戸棚から

博士「実は新一から哀君宛の手紙があるんじゃ」

そう言いながら一枚の封筒を取り出した。

哀「貸して!!」

私は怒鳴り声で言った。

そして奪い取る様にその封筒を取った。

その手紙の内容とは・・・

彼が消えた日（後書き）

こんな文ですみません・・・

未熟ですが

これから頑張って書いていこうと思います

彼の想いと私の想い

私の頭の中にいろいろな彼との思い出が蘇ってくる。

彼と初めて出会ったこと

杯戸シティビルのこと

バスの爆発から私を救ってくれたこと・・・

ブリッ

私は勢いよく封を開けた。

その中には一枚の手紙が入っていた。

私は複雑な気持ちだった。

私はそれを取り出し読み始めた。

『灰原へ

お前がこれを読んだときには俺はここにいないな。

悪い・・・突然いなくなっちまって。

お前を必ず守るって言ったのに・・・

俺が姿を消したのは元の姿に戻れないからじゃない。

前に言ったよな。運命から逃げるなって。

運命から逃げないお前を見て俺も運命から逃げるのをやめた。

俺はジンを追う。組織とのケリをつけるために・・・

組織を潰すのが俺の運命だから。

俺の気持ちを前にお前に伝えたい。

ここで言わないと後で後悔するから・・・

俺は灰原が好きだ！蘭よりも

いやこの地球上の誰よりも・・・

でもお前はこういふだろうな

「どうして私なの？あなたには彼女がいるでしょ！」「って。

蘭にはすまないと思ってる。

ずっと待たせておいて・・・

だけど江戸川コナンとして
俺が今までお前を守ってきたのは
解毒剤を飲んで蘭の傍に行きたかったから・・・
そう思っていた、けど違った。
俺はただお前が好きだから
お前を失いたくないからだと気付いた。
俺は灰原哀、宮野志保を忘れない。
・・・けど灰原
お前は江戸川コナン、工藤新一を忘れてくれ・・・
さようなら

江戸川コナン』

ポタッ ポタポタポタ
私の目から涙が出てきた。
流したくもないのに、自然と出てきてしまう。
(サヨウナラ・・・)
私の中で響き渡る言葉。
彼から一番聞きたくなかった言葉。
私は前に言った。
お互いの気持ちに針を刺す哀しい言葉・・・
彼からその言葉を聞くとは思わなかった。
聞きたくなかった・・・
でもそんな彼は私を好きだと言ってくれた。幼馴染の彼女よりも・・・

彼はこんなにも私を想っていてくれた。

けど私は・・・

彼に何もできなかった・・・してあげられなかった・・・

彼はもういない。

私の傍に帰って来てはくれない。

あの優しい表情で、優しい声で

彼は私を呼んでくれない。

そう思うとまた涙が出てきた。

博士はそんな私を悲しい表情でみていることしかできなかった。

ピンポン

とインターホンが鳴った。

哀「博士・・・出て・・・」

私は涙声で言った。

博士「哀君・・・」

悲しい表情でそう言っていると博士は玄関を開けた。

??「じいさん!」

??「阿笠さん!」

聞き覚えのある声

そこに立っていたのは

西の名探偵服部平次と怪盗キツドの黒羽快斗だった。

服部「工藤が行方不明ってどういうこっちゃ!？」

黒羽「新一の身になにがあったんですか?」

服部と快斗は信じられないといった表情で言った。

博士はしばらく黙り込んだ。

そして何か決意した表情で話した。

博士「哀君。あの手紙見してくれんか?」

私は背中を向けながら無言で頷いた。

博士は側に落ちていた手紙と封筒を拾い
彼らの元へ持っていった。

服部「泣いとんのか？ちっこいねえーちゃん」

黒羽「哀ちゃんがどうして？」

博士は溜息を付き封筒と手紙を差し出した。

服部・黒羽「これは？」

博士「新一の手紙じゃよ・・・」

二人は驚いた顔をした。

服部「なんで工藤が手紙なんか・・・」

黒羽「阿笠さん宛ですか？」

博士「・・・哀君宛じゃ」

服部「ホンマか！それ」

明らかに動揺してる服部。

黒羽「・・・読んでもいいですか？」

冷静な快斗、あまり動揺はしていなかった。

博士「ああ、もちろんじゃ」

そう言うのと快斗に手紙を渡した。

快斗は受け取るとすぐに読み始めた。

しばらくして読み終わり手紙を封筒に戻した。

服部も隣でそれを見ていた。

服部「・・・ホンマどうしようもないやつだなあ」

黒羽「哀ちゃんが泣いてた理由はこれだったんですね・・・」

快斗はそう言うのと灰原の方へ向かった。

黒羽「哀ちゃん」

後ろから声がした

私は俯きながら彼の方を向いた。

彼はしゃがみ私の髪を優しく撫でてくれた。

私は顔を上げることができなかった。

彼は髪を撫でながら話かけてきた。

黒羽「哀ちゃん、新一は必ず君の傍に帰ってくる。」

だから君も新一のことを忘れないでほしいんだ・・・」

哀「黒羽君・・・」

私は顔を上げながら答えた。

黒羽「そんな顔をしていると名探偵に笑われますよ？」

彼は微笑みながら言った。

哀「ええ・・・そうね」

私も微笑みながら答えた。

彼が無事に帰って来ることを信じて・・・

彼の想いと私の想い（後書き）

こんな手紙の内容ですみません・・・

コナン君は無事に帰って来るんでしょうか？

それではこの後も頑張って書きたいと思います。

六年・・・

彼がいなくなつて六年が経つた。

私たちは小学校の課程を修了し、中学へと進んだ。

人々は充実した幸せな日々を送っていた。

蘭さんは高校を卒業してから新出さんと結婚し幸せな家庭を築いた。
ずっと待ち続けていた。

工藤新一ではなく・・・

服部君や黒羽君も幼馴染の彼女たちと幸せに暮らしている。

??「哀ちゃ〜ん」

??「灰原さ〜ん」

??「灰原」

後ろから聞こえてくる聞き慣れた声

明るい性格でくりくりとした大きな瞳が特徴の吉田歩美

丁寧な言葉遣いで頭脳明晰な円谷光彦

ひととき目立つ体を持つ丸坊主の少年小島元太

哀「あなたたち・・・」

私は彼らを知っている。

彼らとはこの六年間ずっといっしょだったから。

歩美「今日から私たち中学生だね。」

光彦「ええ！でも中学生は忙しいですよ〜文化祭とか、受験とか」

元太「まじかよ！俺小学生に戻りてえ・・・」

彼らは楽しそうな表情で話していた。

私はそれを寂しげな表情で見ている

なーに暗い顔してんだよ

(え・・・?)

私は後ろを振り向いた。

だがそこには誰もいなかった。

(・・・気のせいね)

歩美「哀ちゃん、何してるの、おいでくよ」

遠くの方から声が聞こえる。

哀「今行くわ」

そう呟きながら彼らのいる所に向かった。

入学式も終わり私は帰るために校門を出ようとした時

??「哀ちゃん!」

後ろから聞こえてくる走る音と明るい声

哀「吉田さん」

歩美「はあ、はあ・・・いつしよに帰ろう!」

彼女は笑顔でそう言った。

哀「ごめんなさい・・・今日はいつしよに帰れないの」

歩美「どうして?」

彼女は首を横に傾げた。

哀「寄る所があるの」

歩美「どこに寄るの?」

彼女は相変わらず首を傾げたままだった。

哀「・・・お墓」

歩美「あ・・・」

彼女はそう呟いた後悲しい表情をした。

哀「あなたがそんな顔しなくていいわ」

私は微笑みながら言った。

歩美「ありがとう。哀ちゃん」

彼女は私にそう言ってからいつもの明るい顔になった。

歩美「じゃあ気をつけてね」

彼女は手を振りながら言いそして走り出した。

私は優しい表情で彼女の背中を見ていた。

私は花を持ち、墓へと向かった。

私の姉、宮野明美が眠る墓へ

しかし私は信じられない光景を目にした。

彼がいた・・・

六年前、私たちの前から姿を消した・・・
私が待ち続けた・・・

江戸川コナンが・・・

私はその場に立ち留まってしまった。

（早く逢いたい・・・）

逢って私の気持ちを伝えたかった。

でも

私は複雑な気持ちを抱えながら木陰で彼の様子を見ていた。

彼は姉の眠る墓に語りかけた。

コナン「明美さん・・・久しぶり。

ごめん。あの時助けられなくて。

あの時助けることができたら・・・」

そう呟いた後俺の頭に思い出される彼女の言葉

どうしてお姉ちゃんを・・・助けてくれなかったの？

あなた程の推理力があればお姉ちゃんの事ぐらい簡単に見抜けたはずじゃない！

なのに・・・どうしてよ！！

そう・・・

彼女が俺に初めて見せた素顔。

初めて見せた彼女の涙・・・
コナン「・・・俺はもうあいつの涙を見たくない。
でも俺が傍にいとあいつは辛い顔しかない。
辛い顔しかさせてない・・・」
彼は俯きながら呟いた。
そして彼の顔から白い透明な粒が落ちた。

彼は泣いていた。

何もかも見透かしたようなあの瞳から
人の前では見せない彼の素顔。
私の前でも、彼女のの前でも見せなかった・・・
とても悲しい素顔。
コナン「ごめんな・・・志保」
彼は涙声で呟いた。

違う

あなたのせいじゃない・・・
あなたの前で本当は笑いたい。
でも私はあなたから幸せを奪ってしまった。
大切な彼女と共に過ごせる時間を
そして工藤新一として過ごす時間を・・・

私は胸が痛くなった。
彼を見るのが辛かった。

「ごめんなさい・・・」

私は小さく呟き元来た道を歩き始めた。

「！」

（この声・・・）

俺が一番聞きたかった声がした。

愛しい彼女の声。

「はい・・・ば・・・ら？」

コナンは木陰の方を向いた。

だがそこには誰もいなかった。

遠くの方に人影が見えた。

しかしその人影はだんだん小さくなっていった。

コナンは走りだした。

その人影が彼女だったから。

傍に居たいとずっと思っていた彼女だったから

逢いたい

俺の頭の中はその言葉だけだった。

「はあ、はあ・・・」

走り出してだいぶ時間が経っていた。

（灰原・・・どこ行っただんだ・・・）

俺の頭の中は彼女のことだけだった。

「くそ！！」

俺は叫んだ後また走り出した。

私は一人で元来た道を歩いていた。

（彼に会いたかったのに・・・）

私は自分の行動に後悔した。

本当は傍に居たかった。

彼の傍にずっと居たかった。

けど私は彼に辛い思いしかさせていない。

あの時見た彼の素顔。

彼のあんな顔は見たくなかった。

涙を流した悲しい表情は。

「ごめんね。くど・・・」

「誰にあやまつとのや？ねえーちゃん。」

私の言葉は遮られた。

明るい声の関西弁で。

「服部君！？どうしてここに？」

私は驚きを隠せない。

「いやゝたまたま和葉と遊びにきとつてな。

それでねえーちゃんの後ろ姿が見えたから

話掛けたんや」

彼はいつもの調子で答えた。

「それで和葉さんは？」

私はいつもの表情で聞いた。

「ああ、あいつなら先に毛利のねえーちゃんとこ行っとするで」

「そうなの」

私はそう呟いた後右の方へ目を向いた。

目を向けた途端、私は呆然とした。

彼がいたから・・・

私は自然と歩み出そうとしていた。

前へ進もうとした瞬間

ドンッ

私は背中を誰かに押され道路に押し出された。

その時すごい速さで車が向かってきた！

「ねえーちゃん！！」

服部は大声で叫んだ。

灰原は恐怖を感じた。

（私・・・死ぬの・・・？）

誰もが手遅れだと思っていたその時！

「灰原！！」

コナンは灰原を突き飛ばした。

（く・・・どう・・・く・・・ん？）

私は気を失ってしまった。

コナンの体が鈍い音と共に打ち上げられた。

そして地面に叩きつけられた。

彼の体は血で赤く染まっていた・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7183a/>

君の存在の大きさ

2010年10月10日16時01分発行